



カスタマーレビューから：

こんなに面白い少年院体験記は他にない！

★少年院とはどのようなところか……。長年、少年院の教育に携わってきた小生からみても、この本には、著者（及びその友人たち）の体験が、見事に描き出されている。とにかく、著者の描写力はタダモノではなく、どの場面をとってみても「面白く！」（……失礼）読める。

「これから少年院に入りそうな人」「入りたくない人」も、ぜひ読んでみてほしい本だ。小生は、捧腹絶倒！しそうになりながら（電車の中では、さすがに、我慢！）読み終えた。（この本は、著者の『ぶっちぎり少年院白書』の文庫版であるが、2回目で読んでも、やはり面白い！）

★小生は、（他の少年院で）指導する側だった。「ふんふん……、ナルホド……」と読みながら、「少年からすると、あの指導は、このように映るんだ」と、指導する側からの意図に対して、立場の違いからくる見え方の違いがあることを教えられる箇所が、随所に

ある。いや、その連続ともいえるか。

また、著者の筆力の故にか、幾分の「強調」（誇張ともいえるか）がある（と、私は受け止めている）が、彼の体験に基づいて描いている当時の少年院生活の内容に、意図的な「嘘」や「作り事」はないと思う。著者の人柄からいっても、そう信じる。

★少年院とはどのようなところとして設置され、運営されているか。そこでは、どのような教育が行われているか。その公式の目的や意義の紹介・広報は、それを運営する側（施設や法務省関係者）から、たくさん出されているし、小生自身も、講演や文章で、何回も紹介してきた。しかし、その教育が、それを受ける立場から見ると、どのように見えるのか、どのように受け止められているのか、ということも、大切なことだ。

★ある意味では、この本に描かれているのは、著者の”青春物語”，でもある。著者は、その「厳しい」少年院生活で鍛えられたことを、今や誇りとし、堂々と生きている。拍手を送りたい。

